

令和7年度津山工業高等専門学校有識者懇話会議事要旨

1 日 時 令和7年12月19日（金）15時30分～17時00分

2 場 所 津山工業高等専門学校 総合理工学科南館2階 会議室

3 出席者

【委員】

桐生 和幸（美作大学学長）、松田 欣也（津山商工会議所会頭）、針生 博文（谷口 圭
三津山市長代理）、藤原 孝治（日本原子力研究開発機構人形峠環境技術センター所
長）、生駒 徹志（津山高専技術交流プラザ会長）、岡田 正（津山高専同窓会会長）、
松本 健（美作地区中学校長会会長）

【学校関係者】

佐藤校長、薮木副校長、塩田教務主事、荒木学生主事、細谷寮務主事、中村専攻科長、井
上地域共同テクノセンター長、香取国際交流センター長、西尾教育システム点検委員会委
員長、西田事務部長、竹中総務課長、福田学生課長、土屋総務課課長補佐、中本総務課課
長補佐、菊池学生課課長補佐、寺元副校長（欠席）

【陪席】

田中津山市企画財政部高等教育機関連携室長補佐、小林総務課専門職員、山本総務課一般
職員

議事に先立ち、校長から挨拶の後、出席者の紹介が行われた。その後、委員の互選により、
桐生委員が座長に指名された。

4 意見交換内容

校長をはじめ、本校関係者から本校の現状と課題等について説明が行われた。
それに対し、次のとおり質疑応答及び意見等が出された。

【質疑応答】

Q. 津山高専卒業生の地元企業への就職割合はどのくらいか。

A. 津山高専技術交流プラザでは、地域産業の発展を津山高専と一緒に推進している。会員
数は令和7年12月現在で138社であるが、多くの会員企業は、津山高専の卒業生に就職
してもらいたいという希望を持っていると考えられるが、会員企業に就職する学生は、非常
に少数である。

Q. 関西・関東の大都市圏での就職を希望する学生が多いように感じられるが、最近の学生
の就職志向について伺いたい。

A. 就職については、大企業のブランド、給料の良さ、都会へのあこがれなどから多くの学生が関東・関西といった大都市圏へ流れているのが現状である。

Q. 教務主事から説明あった求人倍率3.7倍の中で、新卒で就職をした後にずっとその企業で勤務しているのかあるいは他の企業に転職されたのか不明である。津山市の地元企業の多くは、大企業で勤務経験を経た卒業生を積極的に採用したいと考えているが、津山の企業と津山高専の卒業生を結びつけるプラットフォームがない等の理由から採用に至っているのは一部の企業に留まっている。卒業生とのつながりについて学校としてどのように考えているか伺いたい。

A. 一度県外に就職し、数年後に津山で働くことを希望する学生は、卒業研究や担任の教員等を通じて地元企業への就職を果たしている例もあるが、大半の卒業生はエージェントを活用して地元企業への転職を果たしている。エージェントを活用した場合、給料の高い企業が紹介される傾向があるので、県南の企業に多く紹介が入るようになっているのが現状である。また、卒業生の卒業後の動向については個人間の繋がりでは把握するものがほとんどで、組織的に把握する仕組みは確立されていない。引続き若者の津山圏域の定着者増加に向けて協議を続けていきたい。

【各委員からの意見及び助言】

●中学生が高専への進学を希望する要因として勉強に留まらず、実験をすることで実践的な能力を身に付けることができるため、就職に非常に有利な即戦力のある人材となることができることや、様々な背景を持った学生の受け入れ態勢が整っており、安心してしっかり学べる環境が整っていることが魅力となっていると思われる。津山高専への要望として推薦入試において主要科目はそれほど得意ではないが、課外活動等で成果を上げている生徒を評価する仕組みについて検討していただきたい。

●津山高専で即戦力としての人材を育てた後に、就職で津山から出て行ってしまう学生が多いことが課題の一つであると考えます。教務主事より、津山高専に入学する女子生徒が増加している、特に県北地域の女子生徒が多く受験していることが数値を伸ばしている要因ではないかと考えられるとの話があったが、男子は卒業後一定数が津山圏域に残るものの、女子はほとんど津山圏域に残らない。大都市圏の大企業に人が流れることも、津山市内に様々な企業があることが認知されていないことが要因の1つにあるのではないかと。つやま産業支援センターも精力的に活動していただいている所ではあるが、引続き地域企業のPRに努めていただきたい。

●地元ならではの環境で生まれ育ってきたからこそ生まれてくるようなアイデア、地元への

愛着からくるアイデアが出てくるように学生のころから地域の企業と連携しながら物流や農業の人手不足等の地域課題の解決に向けた教育に取り組んでいただきたい。学生にとって勉強が優先ではあるが、それと並行して在学中から企業の方と一緒に地元の行事に参加することで津山地域に関しての関心・認識を深めていただきたい。具体的には学生にごんご祭りの実行委員会に入っていていただく等、地域活性化のために地域のことを積極的に知る努力をしていただきたい。

●企業側のリソースの効果的な活用方法について、特に情報マーケティングの分野は非常に奥の深い分野であり、産業界と協力しながら深堀りすることによってアントレプレナーに繋がるような連携ができれば新しい“津山モデル”となりうるのではないかな。

●生成 AI を活用した DX が進展している中、津山高専では津山の文化を捉えた上での生成 AI の教育を行うことで、「津山高専で生成 AI を使って勉強したい」と思えるような特徴のある教育を行ってもらいたい。

また、同窓会でも 3 年に 1 度総会を実施しており、出欠連絡を兼ねて卒業後の動向確認を行おうとしているが、返信があるのは 3 分の 1 ほどである。同窓生と津山高専をつなぐプラットフォームについて紹介できるものがあるので、将来的に多くの同窓生と学校が何かしらのつながりを持てるような取り組みを進めていただきたい。

● U ターン就職の問題について、全国の高専で同様の問題が起こっている所であるが、一度就職した卒業生に、帰ってきたいと思ってもらえる津山に変えていくための取り組みと一緒に推進していきたい。また、津山での再就職を希望する卒業生が、フィットする就職先を見つけられやすいように、卒業生全員の追跡ができるようなシステムの構築について検討を進めていきたいと考える。今後も津山高専と各団体との連携を深めていきたい。

以 上